

研究

「東瀛詩選」と中島子玉(一)

解 読 木 許 博

編 集 佐 藤 巧

(会員 佐伯市木立  
(会員 佐伯市池船)



東瀛詩選  
四十卷補遺  
四卷

大清光緒九年歲在  
癸未春三月  
衡陽彭士麟  
書

まえがき

「東瀛詩選」は明治十五年(一八八二)の秋、日本人岸田吟香が日本人の詩集百数十家をもつて、清朝末期の大学者俞樾(俞樾)にその選定を依頼したという。東瀛とは東の大海に浮かぶ日本のことである。

俞樾は清徳清(浙江省)の人で、河南学政提督となり蘇州で経学を治め、杭州の詒經精舎の主講を勤めていた。病气療養中であつた俞樾は日中文化交流のために、あえて依頼を受けたという。晩年は曲園居士と号し、光緒三十二年(一九〇六)八六才で没した。

俞樾が選定した詩選には、日本古今の作家五五〇名と漢詩約五〇〇首が採択されている。特に多いのは広瀬旭莊一七五首、釈六如二三首、官茶山二二首、梁川星巖一〇一首、広瀬淡窓九二首などである。中でも中島子玉三四首、秋月橋門二首が含まれ、二人とも淡窓門下で佐伯藩校四教堂の教授であつた。

本書は有名なわりに案内入手困難で、昭和五六年に佐野正巳編の復刻版が汲古書院より刊行された。これによつて大学教授など研究者の関心が高まったのだろう。故狩生熊義先生は昭和五七年の大分合同新聞に「佐伯の文

人・秋室と子玉」を連載され、その冒頭に「九大教授や慶応大学の教授がわざわざ佐伯まで調べに来られる目標は、中島子玉なのである。」と書き残している。

以上は入手した復刻版の佐野正巳「解題」より多く引用したが、中島子玉・広瀬淡窓・秋月橋門の漢詩解読は木許博先生に依頼した。約一年に及ぶ奮闘の結果、子玉の三四首と秋月橋門の二首、子玉や佐伯に関係のある淡窓の十二首を加えて紹介したい。 さとうたくみ

### 中島大齋

子玉は官儒、官主にして政を学ぶ。僅かに三十有四にして卒す。臨終に一絶句を口占して曰く

高情 自ら世人と違ふ、我は是れ南豊の一布衣、三十六鱗 猶お二を欠く、今朝 天上に龍と化して飛ぶ。

亦奇士なり。誌未だ刊刻せずして止む。写本 字跡有り。弁ずべからざる者多し。故に録する所、多かる無し。其の佳句 固より此に尽くさず。

(1)

冬夜寄元猷

◎冬夜 元猷に寄す

朔風生残夜

朔風 残夜に生じ

擁爐然死灰

爐を擁して死灰を然やす

定知非是雪

定めて知る是れ雪にあらず

不見子猷来

子猷の来るを見ず

### 【大意】

明け方に北風が吹き爐に向かつて灰を再び然やす。雪ではない、灰だ、子猷の姿をこのところ見ていないが、再び勢いを得て甦つてほしい。(子猷の安否消息を案ずる心情…)

### 【語注】

人名。詩中に子猷とあるがどちらかが誤写か？。

朔風 きたかせ。北風。

残夜 夜明け。しののめ。

死灰 火気なきはい。転じて、人の心の無欲にして名利に

冷やかなるたとえ。活気の無い喩。一旦失った勢力を再び盛り返す(死灰復然)。

(2)

夏日

茶甕烟濃一院香

熹微簾日洩斜光

池塘芳草晚春夢

殿閣薰風送晚涼

得病因詩猶作詠

鎖閉除睡更無方

樽中幸有忘憂物

喚取隣翁共舉觴

◎夏日

茶甕烟濃かにして一院香し

熹微かにして簾に日斜光を洩らす

池塘の芳草は春の夢を成し

殿閣の薰風は晩涼を送る

病を得て詩に因り猶お詠を作し

閑を鎖すに睡を除けば更に方無し

樽中 幸いに憂を忘るる物有り

隣の翁を喚取して共に觴を挙ぐ

【大意】

院内は茶の香り満ち、夏の夕日が斜めに射し、池の堤に芳草いまだ香つて夕風が心地よい。病む身にも詩作に耽り、暇あれば気ままに眠る。樽中に酒をみつけては隣の老翁を呼んで盃をあげる。

【語注】

茶甕 ちやがま。／池塘 池の堤。／芳草 かおりのよい

草花。／殿閣 宮殿と楼閣。／薰風 おだやかな初夏の

風。青葉の香を吹き送る風。南風。／晩涼 夕方のすずし

さ。／閑 のどか。のんびりしている。ひま。いとま。／

睡 ねむる。いねむりする。／方 行く先。てだて。やり

かた。／喚取 よびとる。

(3)

夜帰

残星低山光滅明

深夜荒邨断人行

獨樹如人石如虎

樹杪怪禽忽一聲

◎夜帰る

残星 山に低くして光滅明し

深夜の荒邨 人行断つ

獨樹人の如く 石虎の如し

樹杪 怪禽 忽ち一声

【大意】

夜明けの星がまたたき、寒村の深夜は道行く人も無い。一本立ちの樹は人に見えて気味悪く、すわつた石は虎かと思えて恐ろしい。不意に森の梢の不気味な怪鳥の声で肝を冷やす。

【語注】

残星 夜明けの空に残っている星。／滅明 灯火などの

暗くなつたりすること。また、遠くにある物などが見えか

くれすること。明滅。／荒邨 荒れた村。／人行 人の往

来／樹杪 木のこずえ。木の先。／怪禽 あやしい鳥。

(4)

調雲華上人曉其談富山勝賦呈

○雲華上人に調し其の談

「富山の勝」を聴き賦して呈す

吾久慕道人

吾久しく道人を慕い

笑談入夢想

笑談 夢想に入る

吾嘗聽富山

吾嘗て富山を聴き

心情寄圖象

心情 図象に寄す

夢間圖上終恍惚

夢間圖上終に恍惚

何殊隔靴爬痒

何ぞ隔靴癢を爬くに殊ならん

維歲戊寅秋之殘

維れの歳 戊寅の秋の殘

孤錫一留隈水邊

孤錫一たび隈水の辺に留む

雙荷為衣蕙為帶

雙荷もて衣と為し蕙もて帶と為し

容姿瀟洒出泥蓮

容姿瀟洒にして泥蓮より出ず

自說無心亦好奇

自ら無心を説くも亦好奇にして

單身曾到富嶽嶺

單身曾て富嶽の嶺に到る

足踏八朶玉芙蓉

足は八朶玉芙蓉を踏み

手摩星辰相周旋

手は星辰相周旋するを摩す

石室雲洞探已遍

石室 雲洞 探ること已に遍く

神秘驅入五字篇

神秘 五字篇に驅入す

寫之絶頂千秋雪

之れを写す絶頂は千秋の雪

長與嶽色争嬋妍

長えに嶽色と嬋妍を争う

道人奇絶山奇絶

道人奇絶 山奇絶にして

吾收兩奇亦奇縁

吾兩奇を収むるも亦奇縁なり

君不見

君見ずや

蚌口鵝鶩互争勝

蚌口鵝鶩互いに勝を争い

漁人坐觀兩得旃

漁人坐觀して兩つながら旃を得たる

【大意】

雲華上人の話にうっとりさせられてきた。以前富士の絶景を画像で見ても奪われたが、今一の感があった。雲華上人は隈川にしばらく居たが、風流な姿となり、無心の境地で富士に単身で登った。絶景の頂に立ち、星にも手がとどくほど。奥深い神秘的な詩も成った。千年の雪と山嶽の姿のみごとな美。上人も、山も、自分も思いもかけない、ふしぎなめずらしさに出会えたことであつた。思いもかけず「漁夫の利」を得た幸いであろうか。

【語注】

雲華上人 竹田の万徳寺に生まれ、中津の正行寺の養子に入る。東本願寺の講師を務め全国を行脚。筑前の儒学者亀井南冥に師事、広瀬淡窓や頼山陽など多くの文人墨客と交流、詩書画の才能を発揮した。／富山勝 富士山の絶景。／道人 道を身につけた人。神仙の道を得た人。道教を修めた人。俗世間をのがれた人。仏門にはいった人。／**図象** 【図像】絵に書いた肖像。えすがた。画像。／恍惚 ある物事に心を奪われて我を忘れる様子。美しいものにあつて、うつとりする様子。／隔靴癢痒 【隔靴搔痒】靴を隔てて、かゆい所をかく。はがゆいこと。もの足りないこと。／戊寅 文政元年（二八一八）。／錫 道士や僧の使うつえの一種。錫杖。孤錫。／ひとつの錫。ひとつの道士。／隈地 日田盆地を流れる三隈川の略称。／菱荷 菱とはす。／葱 かおりぐさ。香草の名。美しい。かぐわしい。／瀟洒 さつぱりとして清らかなさま。俗気なく上品なさま。／富嶽 富士山の別名。／八朶芙蓉 富士山の形容。富士山を遠望したとき、その頂の凸凹が蓮の花の先端に似ているので富士山を八朶の峰、芙蓉の峰という。朶は花の着いた枝。／星辰 ほし。辰も、星。また、天体。星

座。／周旋 たちいふるまい。動作。世話。追いかけあう。めぐりまわる。／五字篇 五字で書かれた詩歌・文章。／千秋 一千回の秋の意。千年。永久。／嫩色 やまのいろ。／嬋妍 あでやかで美しいさま。また、なよなよとして美しいさま。嬋娟。／奇絶 すぐれてめずらしい。／奇縁 不思議な縁。思いがけない関係。／蚌 貝の名。どぶがい。からすがいの一種。はまぐり。大はまぐりの一種。蚌口。貝の口。／鷓鴣 水鳥の一種。しぎのくちばし。【鷓鴣の争い】しぎとどぶ貝が争っているうちに、漁夫に捕らえられたという故事。両者が争っているうちに、第三者にその利益を占められるというたとえ。漁夫の利。

(5)

小竹邨途中

石田拳确畦隴開  
西山北來至此別  
一水貫中三十里  
直浮山影西南折  
前人右渡後人左  
臨岸民居互出沒

◎小竹邨の途中

石田拳确 畦隴開き  
西山北來 此に至つて別る  
一水中を貫く三十里  
直に山影を浮かべて西南に折る  
前人右に渡り後人左し  
岸に臨む民居互いに出没す

忽見水激兩岸狹

東家西家炊烟結

奇境不知應接忙

風壤自與塵寰別

卻恨詩中無丹青

欲揮彩毫頓摩詰

忽ち見る水激しく兩岸狭く

東家西家 炊烟結ぶ

奇境知らず応接忙しく

風壤 自ら塵寰と別る

却つて詩中丹青無きを恨み

彩毫を揮わんと欲すれども摩詰を懸す

【大意】

山にも畑にも岩石の多い中を、一つの川が山を映して遠くへ走る。道行く人が右往し左往する。岸の家が不揃いに狭く、水がはげしく流れ、炊煙が昇っている。珍しい姿にひかれ俗界とのちがいにひかれる。この風景は絵の具を使うは不要、摩詰（山水画の名手）に任せれば充分。

【語注】

小竹邨 日田郡夜明郷のうち。小野川上流の山間部に位置する。石田 石の多い耕作地。転じて、ものの用をなさないことのとえ。礮确 山に大石の多いさま。萃 Ⅱ まだらうし。一水 一つの川。畦 うね。畑のうね。また、畑。隴 おか(丘)。うね。畑のうね。転じて、畑。

風壤 風と土。風土。塵寰 寰Ⅱ領地。天下。塵界Ⅱけ

がれた世。俗世間。丹青 丹砂と青腹。赤と青の絵の具。

赤い色と青色。彩毫 彩筆Ⅱいろどりをする筆。摩詰

盛唐の詩人王維のこと。山水画にも秀でる。

(6)

専念寺

遙聴経聲出薜蘿

昇天橋畔路盤陀

春深瀧麥初藏雉

雨足溪蘋已聚蜊

出戸茶烟當竹斷

捲簾山色入樓多

請君借與三弓地

遁世築成安樂窩

◎専念寺

遙かに聴く経声 薜蘿より出で

昇天 橋畔 路盤陀なり

春深くして瀧麦 初めて雉を蔵し

雨足りて溪蘋 すでに蜊を聚む

戸を出れば茶烟 竹に当たつて断ち

簾を捲げば山色 楼に入りて多し

君に請う三弓の地を借与せば 世を遁れて安楽の窩を築成せん

【大意】

読経の声を耳にしてごつごつの道を登る。春深く麦は伸び、蛙の子は生まれる。外は茶の煙、山は緑。わずかの土地があつたら、こんな所に安住の別荘でも建てたい。

【語注】

専念寺 佐伯領上直見村真宗大谷派。善教寺末寺。／薜蘿  
 かすら。つる草の一種。転じて隠者の衣服。また、住居。／  
 盤陀 石のわだかまっているさま。馬の鞍。／隴 おか  
 (丘)。うね。畑のうね。転じて、畑。／溪頭 たにがわの  
 水草。／蛸 おたまじやくし。蛙の幼生。／茶烟 茶をわ  
 かすけむり。／三弓 弓Ⅱ弓の形。弓の的までの距離。六  
 尺。／窩 むろ。あなぐら。いわや。すみか。別荘。

(7)

寓關長卿宅

限上分襟夢一場

豈圖鷄黍會君堂

談多昨日連今日

情熱他鄉似故鄉

老樹半沾春雨細

殘花未落晚風香

芸窗相對繡新著

喜鵲聲喧繞柳塘

○関長卿宅に寓す

限上 襟を分かちて夢一場

豈図らんや鷄黍君が堂に会す

談多くして昨日今日に連なり

情熱他郷 故郷に似たり

老樹半ば 沾い春雨細に

殘花未だ 落ちず晚風香し

芸窓相對して新著を繡けば

喜鵲声 喧く柳塘を繞る

【大意】

日田の地で分かれて久しく、いま、君と会食する。故郷に  
 帰った感じ。春雨に殘花も香る。本を開けば、柳の土手に  
 鵲がしきりに鳴く。

【語注】

関長卿 日田郡柚木村医師小関玄珪の子。秋月藩医加  
 峯蟠梁の養子となる。通称享、号を長卿。広瀬淡窓門人。  
 淡窓五才子の筆頭に挙げる。／鷄黍 にわとりを殺して  
 あつものを作り、きびの飯をたく。人を接待すること。客  
 をこころからもてなすこと。／殘花 散り残った花。色香  
 のうせた花。／晚風 夕暮れの風。／香 か。かおり。に  
 おい。かんばしい。こうばしい。／芸窓 技芸のまど。／  
 鵲声 カササギの声。／喧 かまびすしい。やかまし  
 い。／柳塘 やなぎのはえているつつみ。柳堤。

(8)

訪方山完吾新居

案上紛綸書冊推

數楹新築向江開

催詩雨趁鳴鳩至

○方山完吾の新居を訪ぬ

案上 紛綸 書冊を推み

數楹 新築 江に向つて開く

詩を催せば雨鳴鳩を趁うて至り

載酒人先宿燕來

酒を載れば人宿燕に先じて來たる

筍緑初為新逕竹

初めて新逕の竹と為り

石青猶帶舊山苔

猶お旧山の苔を帶ぶ

南軒話罷還高枕

南軒話罷んで高枕に還り

一榻清風夢蟻槐

一榻風清し蟻槐の夢

【大意】

机上に書物が重なつて新築完成。詩を作り、酒が運ばれて人も集まつてきた。竹の子も伸び、石の苔も青い。さて、一眠りして楽しい夢でも見させてもらおう。

【語注】

方山完吾 広瀬淡窓門人？／案上 つくえの上。／紛綸 乱れるさま。多いさま。広大なさま。／数楹 いくつかの柱（丸くふとい柱）。／趁 ゆきなやむ。おう。追いかける。したがう。／高枕 まくらを高くして安らかに眠る。安心するさま。／榻 こしかけ。ながいす。寝台。細長い寝台。／蟻槐の夢 【槐安夢】をいう。唐の淳于棼が酒によつて庭の槐の木の下で昼寝し、槐安國に遊んで王女と結婚し、南柯郡の太守となつて栄えた夢を見た。目がさめて見ると、槐の根もとに蟻の穴があつて、蟻の女王が住ん

でいたという小説に基づく。南柯の夢〔南柯記〕。

(9)

寓重叔容家

倦枕常先鴉鵲起

枕に倦んで常に鴉鵲に先んじて起き

偏知客夜入秋長

偏えに知る客夜 秋長に入るを

園丁汲水塚爲井

園丁 水を汲むに塚を井と爲し

溪女採菱盤作航

溪女 菱を採れば盤 航を作す

土俗稍因留滞熟

土俗稍留滞に因りて熟し

郷情頗爲戲嬉忘

郷情頗る戲嬉を爲して忘る

男兒自抱桑蓬志

男兒自ら桑蓬の志を抱く

休道萊衣負北堂

道うを休めよ萊衣北堂に負うを

【大意】

朝寝坊をして起きる。すっかり秋の夜長の頃となつた。園丁は水を汲み、菱取り女はしごとをはじめる。この土地に逗留して故里も忘れがちとなつたか。だが、男子は立身の夢あり、老親をなぐさめるに尽きるにはあらず。(他郷に居て自らを励ます。)



【語注】

叔容家 知人宅? / 鴉鵲 からすとかささぎ。 / 客夜 旅の夜。 / 園丁 庭また畑の作業をするために雇われて いる人。 / 留滞 とどまり、とどこおる。 停滞。 / 桑蓬の 志 男子が四方に雄々しく活躍しようとする志し。 / 莱 衣 老萊子が五色の衣を着て、老親の心をなぐさめたと いう、その衣。 / 北堂 主婦の居室。 堂 表座敷の北にあ る。 主婦。 母。 母堂。 廟の中の位牌を置く所。

(10)

秋月

◎秋月

青松如帶路趨東 青松帯の如く 路東に趨り  
秋色遙分杳靄中 秋色 遙かに分つ杳靄の中  
細雨隔山來不得 細雨山を隔てて来り得ず  
斜陽映作一条虹 斜陽映じて一条の虹を作す

【大意】

月は空に。松林が遙かに靄の彼方にうつつすらと延びてい る。細い秋雨は山の向こうに。折から夕陽が一すじ虹を映 している。

【語注】

杏 くらい。 ふかい。 はるか。 とおい。 / 靄 もや。 立ち こめた気。 雲のたなびくさま。

(11)

題陶靖節圖

◎陶靖節の図に題す

不愧鳥紗巾上天 鳥に愧じず紗巾もて天に上る  
高風猶入畫中傳 高風 猶お画中に入りて伝う  
伯牙絶後無人繼 伯牙絶後 人の継ぐ無し  
休怪先生琴没絃 怪しむを休めよ先生 琴 絃を没す

【大意】

うすい絹頭巾で天にのぼる。 みごとな風格。 伯牙の絶絃以 後誰も続かない。(すぐれた節操、守るべきみさお、守る べきすじみち……)

【語注】

陶靖節 東晋末の詩人。 名は潜、世に靖節先生といわれ る。 官吏生活を嫌い「帰去来辞」を作つて帰郷。 酒を愛し 自然を楽しむ、琴を友として田園生活を賛美する詩を作 り、後世の文学に大きな影響を与えた。(三五六〜四二

七) / 愧 はじる。また、はじ。はずかしめる。 / 紗巾 さきん 薄絹で作った頭巾。 / 高風 こうふう すぐれて高いみさお。立派な風格。すぐれた人から。気高い風采。高い所を吹くかせ。 / 伯牙 はくが 春秋時代の琴の名人。その琴の音をよく聞きわけた鍾子期が死んでから、琴の理解者がいなくなつたといつて、琴の弦を切つて以後二度と琴をひかなかつたといふ。「伯牙絶絃」。

(12)

題桃源圖

咸陽宮殿已爲灰  
徐福樓船何日回  
咫尺桃源求不得  
笑他辛苦問蓬萊

◎桃源図に題す

咸陽宮殿 かんようきゆうてん 已に灰と為り  
徐福の樓船 じよふくのろうせん 何れの日にか回る  
咫尺 せきせき に桃源 とうげん 求むれども得ず  
他の辛苦 しんく を笑つて蓬萊 ほうらい を問う

【大意】

秦の都咸陽亡び、始皇帝の命令で不老不死の薬を求めた徐福はついに帰らず。理想郷はすぐそこには無い。仙人の住む別天地はどこにもない。

【語注】

咸陽 かんよう 秦の都。今の陝西省咸陽市の東北。秦の孝王のとき初めて都とし、宮殿を築いたが、後に楚の頂羽に焼かれた。 / 徐福 じよふく 秦の方士。始皇帝の命令で、不老不死の薬を求めて東海の蓬萊山を目ざして行き、ついに帰らなかつたという。 / 樓船 ろうせん 物見やぐらのある船。 / 咫尺 せきせき 周の尺度で、咫は八寸、尺は十寸。きわめて近い距離。わずか。少し。せまい。「咫尺の地」。 / 桃源 とうげん 晋の陶潜の「桃花源記」に描かれた仙境。今、湖南省洞庭湖の西に桃源県がある。転じて、俗世間をはなれた別天地。理想郷。ユートピア。桃源郷。 / 蓬萊 ほうらい 想像上の仙山の名。東海の東にあり、仙人が住んでいたという。

